新時代における遍路受入態勢のあり方
～遍路宿泊施設の現状・課題等調査～

上席研究員　大谷　博

○調査の目的

現在、「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会を中心に、四国遍路の世界遺産登録に向けた活動が四国を挙げて展開されています。世界遺産登録が実現すると、外国人を含め来訪者の大幅な増加が予想されるため、今から受入態勢を着実に整備していく必要があります。

しかし、お遍路さんは減少傾向をたどるとともに、遍路道沿線地域では過疎化が進み、後継者難などもあって遍路宿が廃業を余儀なくされています。また、お接待の担い手である住民も減るなど、遍路文化の維持・継承を危うくしかねない事態が進行しつつあります。

こうした問題意識から、本調査は、将来の世界遺産登録を見据え、宿泊施設をはじめ遍路受入態勢の現状や課題を分析し、あるべき方向について検討しました。

○調査の実施

本調査は、四国経済連合会と、四国の地方銀行４行（阿波銀行、百十四銀行、伊予銀行、四国銀行）による四国創生に向けた包括提携「四国アライアンス」の「地域経済研究分科会」（4行の系列シンクタンクで構成）が共同で実施しました。

○調査報告書

調査報告書は 2019 年 6 月 18 日に高松市で記者発表するとともに、関係先に配布しました。次ページ以降は要約と概要版ですが、四国経済連合会のホームページ（http://www.yonkeiren.jp）から本報告書の概要版・本編ともダウンロードすることができます。

近年、外国人遍路が人数こそまだ少ないものの、大幅に増えています。こうした外国人をはじめ、お遍路さんの今後の受入態勢を地域で検討していく上で、本報告書がご参考になれば幸いです。

※調査を担当したシンクタンク

公益財団法人徳島経済研究所、一般財団法人百十四経済研究所

株式会社いよぎん地域経済研究センター、株式会社四銀地域経済研究所

要　旨

1．　四国遍路の歴史を振り返ると、昭和には団体バス遍路が、平成にはマイカー遍路が全盛期を迎えたが、近年、いずれも減少傾向にある。全体の遍路人数は 10 数年前に比べ 4 割程度の大幅減少になっている可能性がある。

2．　遍路宿泊施設については、遍路人数の減少に加え、宿主の高齢化や後継者難、人手不足などにより、過疎地域で宿不足が深刻になっている。歩き遍路の場合、車のように広域的に移動できないため、遍路道沿いでの宿不足が大きな問題となる。

3．　「お遍路さんの減少」、「遍路宿泊施設の不足」に加え、「地域住民（お接待の担い手）の減少」、「遍路道の維持修復難」という“4 つの問題”が、今後、遍路文化の維持・継承を揺るがしかねない。こうした構造的問題を解決するための糸口になると期待されるのが、歩き遍路、なかんずく外国人歩き遍路である。

4．　外国人歩き遍路は年間 400 人程度（遍路人数の約 0.5%）にとどまっており、熊野古道に比べても見劣りする。その主因は、団体バス遍路やマイカー遍路に適合した日本人向けの受入態勢が、外国人歩き遍路のニーズにうまくマッチしていないためである。

5．　スペインのサンティアゴ巡礼路では、1992 年に 1 万人に満たなかった巡礼者が、1993 年の世界遺産登録を経て、右肩上がりで増加し、2018 年には 32 万人を超えた。歩きの巡礼旅は世界的なブームになっているが、四国遍路はその流れにうまく乗れていない。

6．　サンティアゴ巡礼路では、行政主導で整備した巡礼者専用の簡易な宿「アルベルゲ」が巡礼者の増加、さらには地域活性化に大きく寄与している。その多くは、使われなくなった建物を改装した大部屋・2 段ベッド、素泊まり（1 泊千円程度）の宿である。

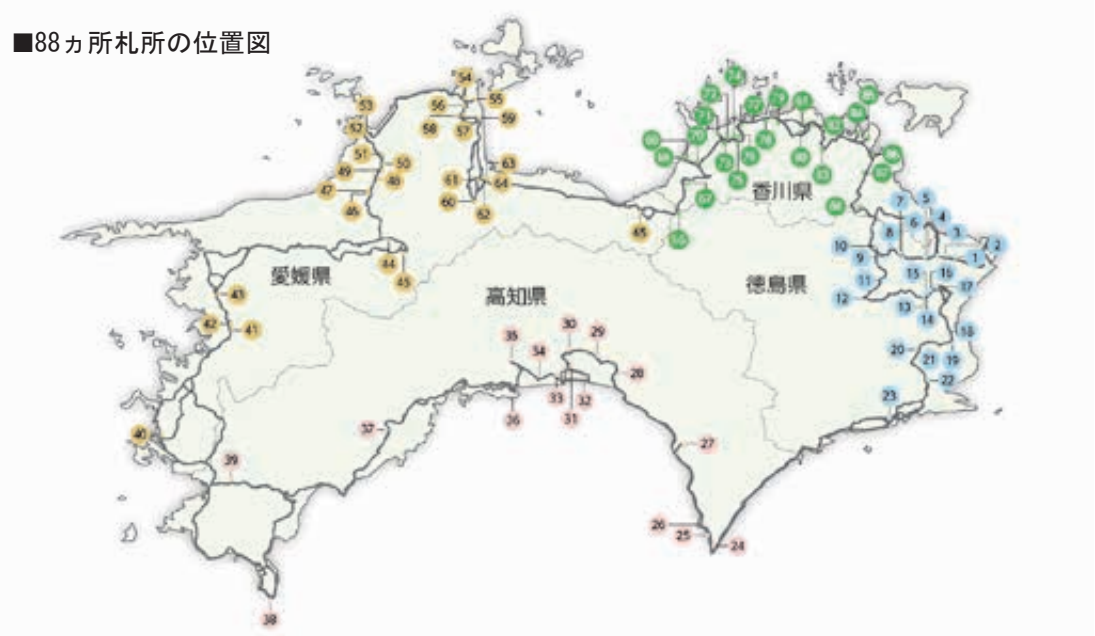
7．　外国人歩き遍路にとって最大の困り事は、宿泊施設である。外国人は日本までの航空運賃などに大きな出費をしており、四国での滞在も 40 ～ 50 日に及び滞在費が嵩むため、宿泊費を切り詰めたいと考える。スペインのアルベルゲでは格安で泊まれることもあり、四国での宿泊料金に強い割高感を抱く。また、ネット上での英語による宿泊施設の情報が少ないほか、外国人からのメールや電話での宿泊予約に対応できない宿もある。

8．　今後は、①「外国人遍路の受入態勢整備に本格着手する～四国版アルベルゲの整備など宿泊施設不足への対応およびお遍路さん向けコンシェルジュ機能の強化～」、②「“駆け足遍路”から“体験型・滞在型遍路”に変えていく」、③「お遍路さんの受入態勢づくりに地域を挙げて取り組む」ことが重要と考えられる。

9．　令和の時代を迎え、外国人遍路によって特徴づけられる「四国遍路新時代」が到来するかどうかは、四国側の受入態勢づくりにかかっている。

第1章
お遍路さんの大幅な減少と四国遍路新時代の幕開け

■88ヵ所札所の位置図



1-1　四国遍路の概要とお遍路さんの変遷

・四国遍路とは、四国一円に点在する空海ゆかりの88ヵ所の札所巡礼。
・総延長は1,400kmに及ぶとされ、全行程を歩き通す四国遍路は大変な苦痛や危険を伴うため、かつて四国遍路をする人は一部に限られていた。
（近年は道路整備により、歩きの総延長は1,200kmに短縮されているものの、全行程を一気に巡ると、40日～50日程度を要する）

・戦後（昭和）になると、伊予鉄道が1953年（昭和28年）に四国八十八ヶ所順拝バスを始めたことをきっかけに、いわゆる「団体バス遍路」が一般化した。

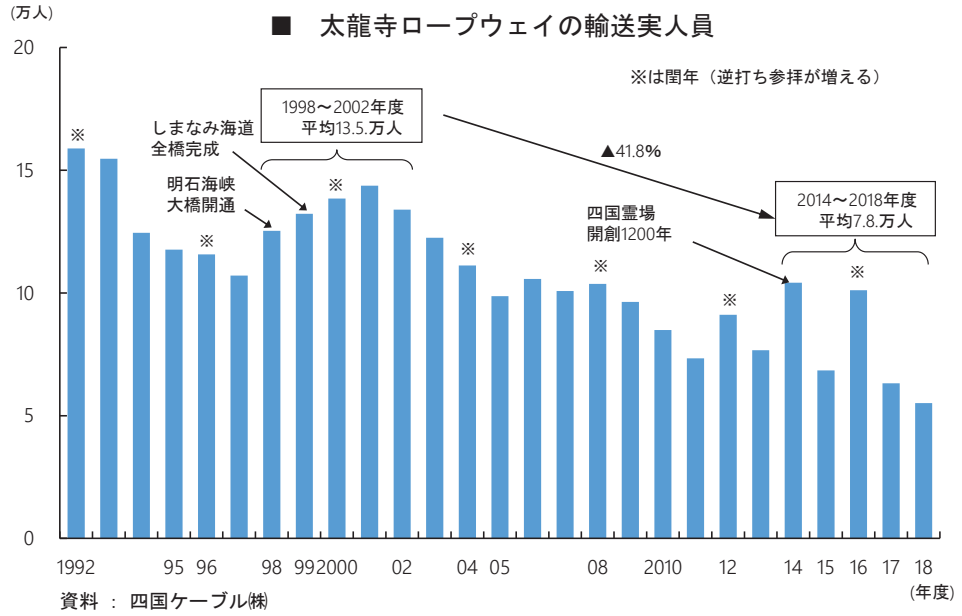
・平成の時代には、本四連絡橋や高速道路の整備進展※により、四国が本州と陸続きとなり、札所へのアクセスが格段に改善されたことで、日帰り遍路・週末遍路とも呼ばれるマイカー利用のお遍路さんが大きく増加した。

・このように、昭和では団体バス遍路、平成ではマイカー遍路が人気を博したことで、多数のお遍路さんが四国を訪れるようになった。

※開通年は、瀬戸大橋が1988年（昭和63年：平成元年の前年）、明石海峡大橋が1998年（平成10年）、しまなみ海道が1999年（平成11年）、四国４県都をＸ字型に結ぶ高速道路が2000年（平成12年）である。

1-2. お遍路さんの大幅な減少（１）

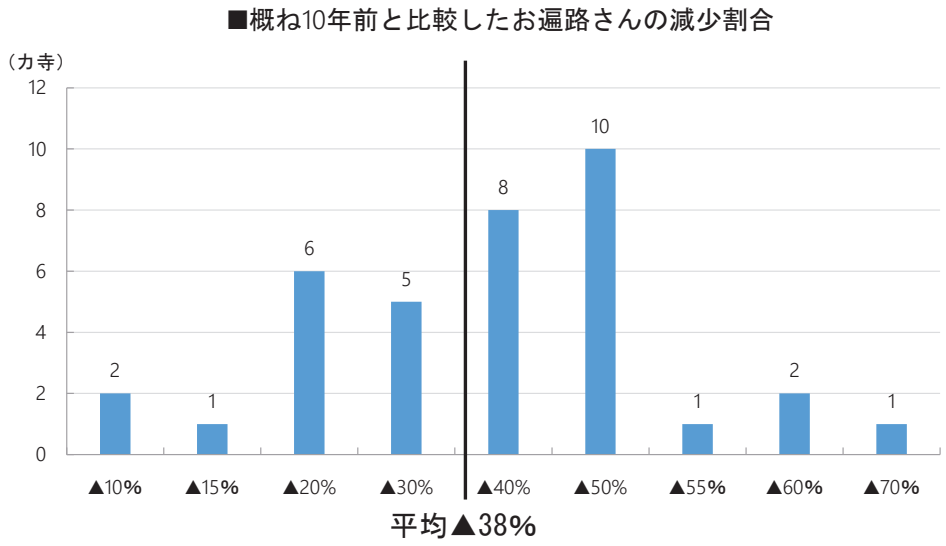
・遍路人数は10数年前に比べ４割程度の大幅な減少になっている可能性がある。
・21番札所太龍寺をお参りするお遍路さんの大半が利用するロープウェイの輸送実人員は最近５年間の年平均で約7.8万人であり、この10数年の間に４割も減少。



資料 ： 四国ケーブル㈱

1-2. お遍路さんの大幅な減少（２）

・札所へのアンケート調査でも、回答のあった36ヶ寺全てが「巡礼者数が概ね10年前に比べ減っている」と答え、減少割合の平均は▲38%。

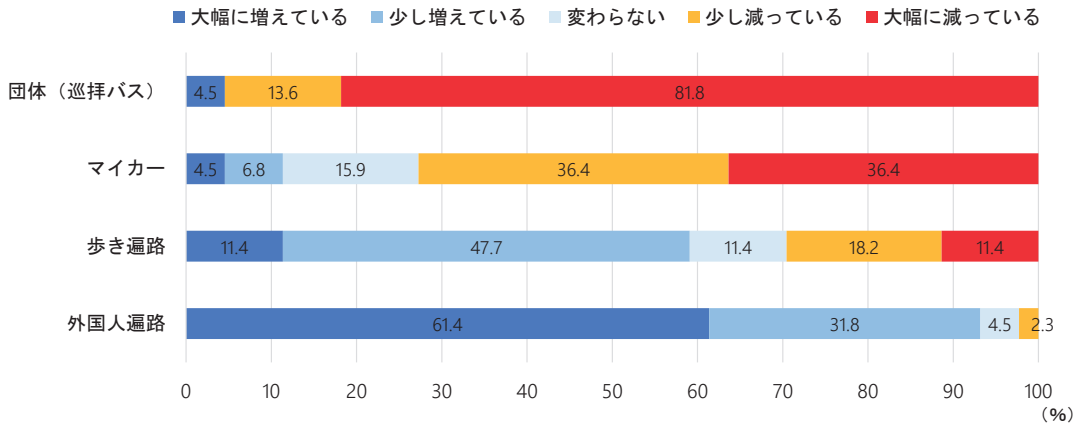


資料：「遍路の受入態勢等に関するアンケート調査」（対象：四国八十八ヶ所霊場）

1-3. 日本人遍路の大幅な減少の背景

・日本人の宗教離れやレジャー多様化、国内外観光地との競争激化、団体旅行から個人旅行への移行等により、マイカー遍路が減少し、団体バス遍路も大幅減に。
・一方、歩き遍路は底堅く推移し、また、外国人遍路は顕著に増加。

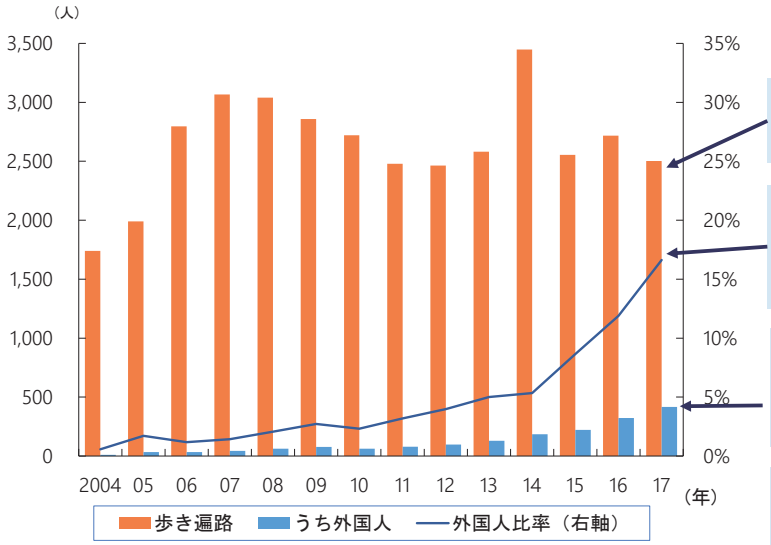
■交通機関別の近年の巡礼者数の動向
［概ね10年前との比較］



資料：「遍路の受入態勢等に関するアンケート調査」（対象：四国八十八ヶ所霊場）

1-4.歩き遍路と外国人遍路の動向

■遍路大使任命数（対象：結願した歩き遍路）



注１）各年の７月１日～翌年６月30日までのデータ。
　　例えば、2004年は2004年７月１日～2005年６月30日の合計。
注２）１年間のデータがとれる2004年７月１日以降のデータにより、グラフ化した。
資料：NPO法人遍路とおもてなしのネットワークＨＰ

歩き遍路の総人数は約2,500人程度で底堅く推移。

歩き遍路に占める外国人比率は上昇傾向にあり、2017年で16.6%にまで上昇。

外国人歩き遍路は顕著に増加。2017年は約400人で、10年前の10倍（2007年44人）。

遍路人数のうち、歩き遍路は約3%、外国人歩き遍路は約0.5%に過ぎない。（太龍寺ﾛｰﾌﾟｳｪｲ輸送実人員の最近５年間の年平均7.8万人を分母とした場合）

1-5. 遍路人数の今後の見通しと四国遍路新時代の幕開け

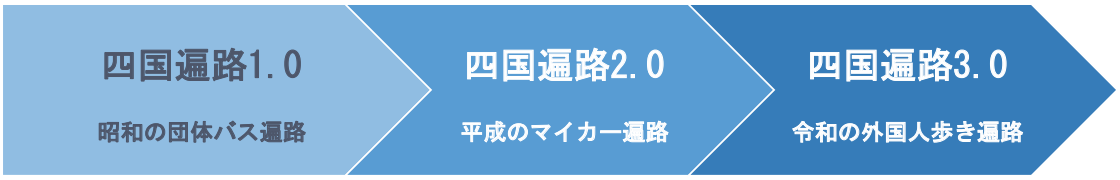
１．日本人遍路は引き続き減少傾向をたどる可能性が高い。

・日本人の人口減少　　・定年延長による働く高齢者の増加
・宗教離れ　　・レジャーの多様化
・国内外の観光地との競合　　・自動車の保有・運転を敬遠する人の増加etc.

２．外国人の歩き遍路は、大幅に増加する可能性がある。

・歩きの巡礼旅は世界的なブーム（スペインのサンティアゴ巡礼路では、巡礼者が年間１万人以上のペースで増加し、2018年には32万人超へ）
・令和の四国遍路は、外国人遍路の存在感が大きく高まり、「四国遍路3.0」とも呼ぶべき戦後３回目の大変革となる可能性。
・四国遍路新時代（四国遍路3.0）が到来するかどうかは、四国側の受入態勢づくりにかかっている。

■戦後以降の四国遍路の変遷



第2章　遍路宿泊施設の現状と課題

2-1. 遍路宿泊施設の構造的変化とその背景

・遍路宿泊施設の総数はほとんど変わっていない。
・内訳をみると、ビジネスホテルが増加する一方で、旅館や宿坊が大幅に減少。
・旅館・宿坊の減少の背景には、遍路人数の減少、団体旅行から個人旅行へのシフト、宿主の高齢化・後継者難、人手不足の深刻化などがある。

■遍路宿泊施設の類型別推移

	1997年	2016年	増減	一般的な特徴
旅館	332	219	▲113	和室、共同の風呂
民宿	165	172	＋7	和室、共同の風呂・洗面所・トイレ
宿坊	45	24	▲21	和室、共同の風呂・洗面所・トイレ
ビジネスホテル	141	225	＋84	洋室、個室に浴槽・洗面所・トイレ
ゲストハウス	9	16	＋7	2段ベッドで相部屋、共同の風呂・トイレ等
善根宿・通夜堂	20	32	＋12	善意で泊まる場所を提供（無料）
計	712	688	▲24	—

資料：へんろみち保存協力会編『四国遍路ひとり歩き同行二人』をもとに作成

2-2. 過疎地域を中心とした遍路宿泊施設不足の顕在化

・遍路宿泊施設数は地域間で大きな格差がある。
・歩き遍路は遍路道沿線で宿がとれないと、長距離歩行や野宿を余儀なくされる。

■遍路宿泊施設分布図

一定規模の都市部、有名観光地には多く立地。

山間部、太平洋側で少なく、空白地域も散見。

歩き遍路は、車のように広域的に移動できないため、遍路道沿いでの宿不足が大きな問題になる。

資料：へんろみち保存協力会編『四国遍路ひとり歩き同行二人』をもとに作成

2-3. 遍路宿泊施設を巡る動き(1) ～ＵＩＪターン者による民宿・遍路宿～

・最近の動きとして、民泊新法の施行も追い風となって、空家などを活用したＵＩＪターン者などによる民宿や遍路宿が増えている。

■病院保養所跡を活用した民宿
・(株) ONIWA（高知県芸西村）
・Ｉターン移住者が経営
・周辺観光地紹介、ボディケアサービス等

撮影：四銀地域経済研究所

■空き家を活用した遍路宿
・遍路宿横屋（愛媛県新居浜市）
・経験豊富な先達が経営
・英語を話せる管理人によるガイド、サポート等

資料：横屋ＨＰより

2-4. 遍路宿泊施設を巡る動き(2) ～地域住民の力を活かした公設民営の宿～

・四国には、行政が整備を担い、運営は地域住民が行う公設民営の宿泊施設の中に、遍路宿として利用されているところがある。
・徳島県勝浦町の「ふれあいの里さかもと」は、廃校を活用した宿泊施設で、勝浦町が事業主体となり、住民有志が設立した組織が指定管理を受けて運営。
・お遍路さんが利用者の半数弱を占め、外国人の利用も少なくない。

■廃校を活用した公設民営の宿「ふれあいの里さかもと」（徳島県勝浦町）

注）左：旧坂本小学校を宿に改装。右：住民手作りの夕食を楽しむ欧州から訪れた外国人遍路

（参考）スペイン・サンティアゴ巡礼路の巡礼宿　“アルベルゲ”

・使われなくなった建物を政府機関が買い取り、巡礼者専用の宿として整備。
・ドミトリー形式（２段ベッドの大部屋）で、１泊素泊り千円程度と格安。
・食事を提供しないため、周辺には飲食店や商店が自然発生的に出店。
・アルベルゲの存在が、巡礼者の増加と地域活性化に大きく貢献。

■アルベルゲの外観（左）と客室（右）の様子

注）左：病院だった建物をアルベルゲに転用。右：大人数が泊まれる客室（男女同室も多い）

写真提供：北山健一郎氏（左）

（参考）スペインの巡礼宿　“アルベルゲ”による四国への示唆

・アルベルゲは、「空家等の活用」、「素泊りのみ」「相部屋・２段ベッド」、「ボランティアの活用」、「予約不可・先着順」など、コスト削減のための工夫を徹底することで、民間宿泊施設との棲み分けと安価な料金設定の実現に成功。

■一般的な遍路宿とアルベルゲとの相違点

	一般的な遍路宿	公営のアルベルゲ
設置主体	民間	自治体・教会など
利用形態	１泊２食	素泊り
宿泊料金	７千円程度	5～10ユーロ（625～1,250円※）
客室	和室（最近は相部屋拒否の利用者が増え、収容力が低下）	相部屋・２段ベッド （大部屋で男女同室も多い）
寝具・シーツ	宿が布団・シーツを準備	利用者が寝袋持参、シーツは不織布製の使い捨て
スタッフ	宿主の家族やパートなど	巡礼を経験したボランティア
予約の有無	予約優先	予約不可・先着順
連泊	連泊可	連泊不可

※１ユーロ＝125円とした場合

第3章　外国人歩き遍路受入の意義と課題

3-1. 遍路文化の維持・継承を揺るがす“4つの問題”

遍路文化の４つの構成要素が抱える課題
１．お遍路さんの減少
✓　団体バス遍路とマイカー遍路を中心に大幅に減少
２．遍路宿泊施設の不足
✓　過疎地域などで宿不足が顕在化
３．地域住民（お接待の担い手）の減少
✓　人口流出と少子化で継続的に減少
４．遍路道の維持修復難
✓　地域住民の減少・高齢化により、昔ながらの遍路道が次第に荒れたり、豪雨等で被害を受けても早期の修復が困難化

3-2. 歩き遍路の意義

歩き遍路、なかんずく外国人歩き遍路が、遍路文化の維持・継承を揺るがす構造的問題を解決するための糸口になると期待される。

１．お遍路さんを増やすには、外国人に期待するしかない

✓ 歩き遍路は遍路文化の象徴として、最も大切にすべき存在。
✓ わが国の人口減少等を考慮すると、日本人の歩き遍路を増やすことは容易でない。
✓ 外国人遍路は日本人以上に四国遍路を理解し、その魅力に傾倒する人が少なくない。

２．遍路道の維持・保存に寄与

✓ 遍路道の維持には、一定数以上の歩き遍路の確保が大前提。
✓ 外国人を含め歩き遍路が増えることが、遍路道の維持に繋がる。

３．地域への大きな波及効果、過疎地域活性化・人口流出抑制の原動力に

✓ 歩き遍路はお金のかかる“贅沢遍路”（約50日間で約40～50万円が必要）
✓ 一人当たりの消費額が大きく、経済効果は山間部などにも行き渡る。
✓ スペイン・サンティアゴ巡礼路では、巡礼宿周辺に民間の宿泊施設や飲食店などが開業して集落が活気を取り戻した事例がある。

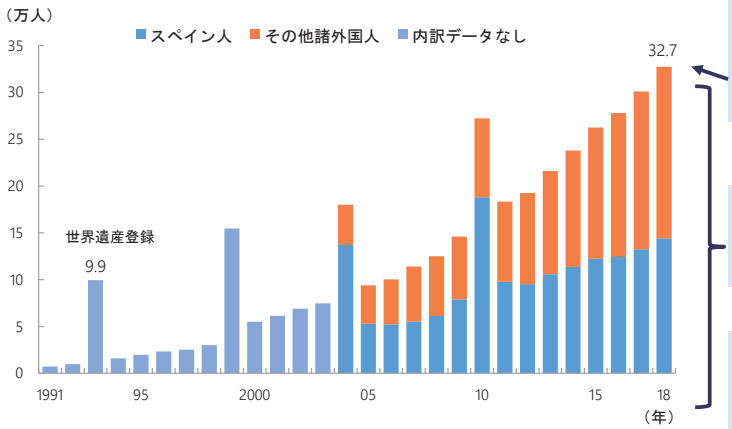
４．宿の経営安定化・新規参入を後押し、世界遺産登録にも間接的に貢献

✓ 外国人歩き遍路は平日・休日の区別なく宿泊し、閑散期の夏や冬にも来訪。
✓ 外国人遍路の増加は、地域での遍路文化への誇りや景観保全の機運醸成に寄与。四国遍路には人種や国籍を問わず普遍的価値があることを示すことにも繋がる。

3-3. 外国人遍路の将来性

・歴史ある巡礼路の「歩きの巡礼旅」が、地球規模で静かなブーム。
・サンティアゴ巡礼路の巡礼者は年平均１万人以上増加し、昨年は32万人超。
・巡礼者増加の主因は、世界遺産登録ではなく、巡礼宿などの受入態勢整備。

■スペイン・サンティアゴ巡礼路の巡礼者数の推移



・1993年の世界遺産登録を経て、この20数年間、年平均１万人以上のペースで増加し、2018年には32万人を超えた。

・巡礼者の国籍は地元スペインが５割を切る一方、欧州全域、北米、アジアに広がっている。

・巡礼者の目的は、信仰のためというよりも、「歩きの巡礼旅」をすることにある。

注）1993年、99年、04年、10年は聖ヤコブの日（7月25日）が日曜日に当たる「ヤコブの年」で、その年に巡礼すると贖罪されるとされるため、巡礼者が大幅に増える。
資料：サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼事務所 HP

3-4. 外国人歩き遍路の困り事

・外国人は何もわからないまま歩き遍路を始める。

言葉がわからない	土地勘がない	作法を知らない	習慣がわからない

・スマホの翻訳アプリや地図アプリの精度向上、ガイドブックや遍路経験者のブログなどで、上記の不都合はある程度軽減

・最大の困り事は宿泊施設

・インターネット上に英語の宿泊施設情報が少ない。
・宿の基本情報・写真（客室、風呂･ﾄｲﾚ、料理、建物の全景など）が乏しい。
・予約やｷｬﾝｾﾙに苦労する（ﾒｰﾙでの予約受付なし、電話で英語が通じない）
・食事メニューに選択の自由がない、ﾍﾞｼﾞﾀﾘｱﾝ向けﾒﾆｭｰのある宿が少ない。
・宿代の支払いで、キャッシュレス決済対応がない　etc.

・大半の宿泊施設が日本人に合わせた設備・サービスになっているため、外国人のニーズと大きく相違。

3-5. 外国人歩き遍路と日本人歩き遍路における真逆の宿泊ニーズ

・外国人は、日本までの航空運賃などに大きな出費をしている。また、歩き遍路の場合40～50日程度かかるため、四国での滞在費用も嵩む。このため、宿泊施設に対しては、快適性より宿泊料の安さを非常に重視する。
・スペイン・サンティゴ巡礼の経験者は、公営の巡礼宿「アルベルゲ」（１泊千円程度）との比較から、四国での宿代に強い割高感を持つ。

日本人遍路と外国人歩き遍路のニーズの違い

項　目	日本人遍路	外国人歩き遍路
宿泊料	・安さより快適性を優先	・宿泊料の安さを優先
部屋タイプ	・相部屋拒絶（個室志向）	・相部屋ＯＫ
交流	・知り合い中心に会話	・巡礼者や地元の人との交流を希望
食事	・1泊2食付を受け入れ	・素泊りを歓迎
滞在期間	・極力短く （早朝出発など）	・その地域が気に入れば数日滞在

3-6. 外国人遍路に対応した宿泊施設の未整備によるリスク

現状の受入態勢のまま、将来、外国人歩き遍路が大きく増えると、どうなるか。

野宿増加や悪評拡散の恐れ

・宿が不足している過疎地域では、春や秋のハイシーズンの休日を中心に、満室で宿泊を断られるお遍路さんが続出する恐れ。

・止む無く市街地等にあるホテルまで長距離を歩き続けるか、タクシー等で行くことになる。野宿を余儀なくされる可能性もある。

・野宿の増加は地元住民にとって迷惑であり、住民とお遍路さんとの軋轢につながる。

・多くの外国人が宿不足を不満に思い、悪評がＳＮＳで世界に拡散する恐れもある。

今のところは、地元の「善意」が外国人歩き遍路を支えている

・外国人歩き遍路が宿探しなどに困っていると、見兼ねた人たちが善意でサポート。
（札所、地元住民、宿泊施設経営者、その他ボランティア）

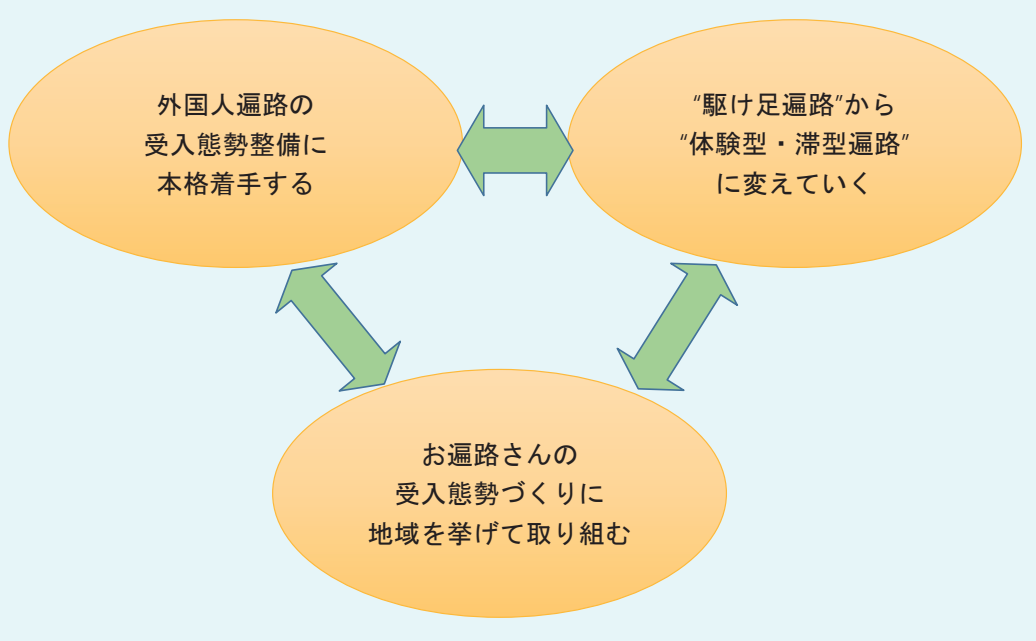
・サポート要請が常態化すると、善意頼みでは続けられなくなる。

今のうちから、善意に頼りすぎない持続可能な仕組みが必要

・過疎地域での安価な宿の整備や、宿手配を安心して任せられる仕組みが必要。

第4章　新時代におけるお遍路さん受入態勢の整備に向けて

■四国遍路新時代における受入態勢づくりのイメージ図



方向性1　外国人遍路の受入態勢整備に本格着手する

（1）過疎地などでの宿泊施設不足への対応

四国版アルベルゲの整備検討

・宿泊施設が不足している地域で、使われていない建物を活用して、簡易な宿を整備
・廃校や閉鎖された幼稚園、病院・診療所、旅館・民宿・宿坊、古民家などを利用
・宿の設備やサービスは最低限にして、初期投資や運営費を抑え、低料金を実現

民泊の推進、空家の活用

・民泊新法を追い風に、宿不足の地域で、民泊を推進。
・空家オーナーと民泊希望者とのマッチングを進め、宿経営希望者の力を引き出す

（2）お遍路さん向けコンシュルジュ機能の強化

“遍路インフォメーションセンター（仮称）”の設置

・外国人向けのガイダンス機能や困り事相談の機能を持つ総合窓口を設置

外国人歩き遍路に対応できる着地型旅行会社の設立

・小規模宿泊施設と外国人歩き遍路を有料で宿泊予約の仲介。
・Ｗｅｂ（英語）を使って、外国人からの問い合わせ、宿泊の予約・決済・キャンセルを宿に代わって代行

方向性２　“駆け足遍路”から“体験型・滞在型遍路”に変えていく

四国遍路Deep　～遍路文化を深く知る～

札所独自のストーリーや豊富な資源を解説付きで案内し深く知ってもらう。

・札所の成り立ちの歴史や古くから伝わる伝説
・由緒ある寺院建築物や美しい日本庭園
・歴史的価値のある仏像など文化財　etc.

四国遍路Experience　～遍路文化を体験する～

札所ならではの体験メニューを提供する。

・勤行、写経、阿字観（真言密教の瞑想法）
・精進料理の提供　etc.

四国遍路Plus　～札所の周辺地域を巡る～

札所周辺の見所を周遊ルート化して、地域全体の魅力を味わってもらう。

・札所の奥の院や別格霊場、番外霊場
・弘法大師ゆかりの地
・自然景観や地域ならではの集客施設　etc.

方向性3　お遍路さんの受入態勢づくりに地域を挙げて取り組む

・過疎地域での宿泊施設の整備・運営、お遍路さんへの体験型・滞在型メニューの提供を進めるには、地域の多様な主体を巻き込む必要がある。

■地域の多様な主体

これまでの主な受入主体（団体バス遍路・マイカー遍路に対応）

・札所　・バス会社　・旅行会社　・ホテル、旅館
・ガイドブックの出版社　etc.

これからの受入主体（外国人はじめ滞在型・体験型遍路に対応）

上記に加え、
・地域住民　・観光関連以外の民間事業者　・自治体　etc.

・地域住民との交流は、多くの歩き遍路が希望し、その満足度も高い。
・住民は歩き遍路と日常的に接することで、遍路価値の再認識、地域への誇り、遍路文化の維持・継承への動機づけともなる。

おわりに

・四国遍路の歴史を振り返ると、昭和には団体バス遍路が、平成にはマイカー遍路が全盛期を迎えた。遍路人数が大幅に減少する中で、令和の時代を迎え、外国人歩き遍路の増加という新たな動きに、どう対応するかが問われている。

・デジタル化とグローバル化を背景に、世界中の個人旅行者がスマホを頼りに、言葉や地理も分からない土地を旅する時代になっている。
・こうした時代潮流や世界的な「巡礼路の歩き旅」ブームも追い風に、サンティアゴ巡礼路（巡礼者32万人）や熊野古道（田辺市の外国人宿泊者4万人）では、多くの巡礼者が訪れ、地域に経済効果が生まれている。

・外国人歩き遍路は年間400人程度（遍路人数の約0.5%）にとどまっている。その主因は、これまでの団体バス遍路やマイカー遍路に適合した受入態勢が、外国人歩き遍路のニーズにうまくマッチしていないためである。

・今後、外国人遍路が徐々に増えていくことは歴史の必然である。この流れを地域の積極的な創意工夫により太く大きくできれば、外国人歩き遍路が日本人遍路の減少を補うだけでなく、過疎化に悩む地域を救う存在になる可能性がある。

・今こそ、地域が一丸となって、外国人歩き遍路のための受入態勢を整備することで、より多くの巡礼者を受け入れ、遍路文化の維持・継承と地域活性化の両立に繋げていくべきである。

以　上